

三河アララギ

平成二十四年

二月号

第五十九卷 第二号



ニューヨーク日記(64) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

December 24, 2011 : Christmas eve dinner

Blue Shoe Diaries



今年のクリスマスイブのディナーはお友達の家で!一緒に作ろうと言ったは良いが私はキッチンで一緒におしゃべりしながらワイン飲んでつまみ食いしてただけ。。。その間にこんな凄い子羊の脚が見事に焼き上がり!クリスマスらしいでしょ?肉汁もむだなく下にあるポテトが吸い込んで美味しいポテトの出来上がり。美味しかったよ〜沢山食べた後は子供達が寝てから皆で「サンタ」になりきってツリーの下にプレゼントを飾ってクッキーの齧りかけをのこしてクリスマスの準備完了!

This year, we did Christmas dinner at our friends' place! I was supposed to help cook but ended up just chatting in the kitchen while I sipped some wine and munched on everything that was being prepared! And magically my friend produced this impressive leg of lamb that was so juicy and delish! And not a drop of jus was wasted as all the potatoes soaked that up making them heavenly. After feasting on a lot of yummy food, and the kiddies were sent to bed, we played the role of Santa by placing the gifts by the tree and making sure to eat the cookies the girls left for Santa. Mission accomplished! Christmas done well!

目次

第五十九卷第二号(通卷六九八号)

表紙 自由	今泉 由利 (1)	ジャングルジム	秋山 逸穂 (28)
ニューヨーク日記(64)	Blue Shoe (2)		阿部 淑子 (28)
感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」	(4)	『ことよせ』	白井 信昭 (28)
歌集「一本の木」	杉浦 弘 (5)	「俳句」	いーはとぶ (29)
冬至の海	岡本八千代 (6)		植村 公女 (30)
霜柱	今泉 由利 (7)		一石 (30)
注連縄	伊藤八重子 (8)		喜仙 (31)
金の鯨	弓谷 久子 (9)		皓一 (31)
棚雲	青木 玉枝 (10)	和歌から派生した季語の本意(その十九)	佐藤 喜仙 (32)
皆既月食	内藤 志げ (11)	贈呈誌 十二月号	夏目 勝弘 (34)
白南天	胃甲 節子 (12)	私の一首	弓谷 久子 (34)
孫三人	安藤 和代 (13)		青木 玉枝 (34)
ふる里を思ふ	林 伊佐子 (14)		安藤 和代 (35)
雪かぶる	佐藤 喜仙 (15)		伊藤 忠男 (35)
歌劇	伊与田広子 (16)		伊与田広子 (35)
櫟	清澤 範子 (17)		今泉 雅勝 (36)
明日を夢みて	伊藤 忠男 (18)	絹の話(14)	今泉 雅勝 (38)
師走入り	近藤 映子 (19)	絹の話(15)	今泉 雅勝 (38)
姫街道	半田うめ子 (20)	物理学者と詩歌の世界(25)	今泉 雅勝 (38)
白鳥	金津 文枝 (21)	斎藤茂吉と御津磯夫五	今泉 雅勝 (38)
湖東	北川 宏廸 (22)	「氷魚」のことから(133)	今泉 雅勝 (38)
向ふにも	杉浦恵美子 (23)	ことのはスケッチ(398)	今泉 雅勝 (38)
究極の夢	堀川 勝子 (24)	編集雑誌	今泉 雅勝 (38)
柚子	小野可南子 (25)	和菓子街道(64)	今泉 雅勝 (38)
大豆の莢	山口千恵子 (26)	お知らせ・編集後記・三河アララギ規定	今泉 雅勝 (38)
山の辺の道(1)	夏目 勝弘 (27)		今泉 雅勝 (38)

感 銘 歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」

島二つ昏れゆく海の町に入る老いのいとまのある顔をして

P
190

恒の日の我にかへりて青羊歯の萌えのかくめる石のへにをり

P
191

歌集 「一本の木」

杉 浦 弘

山城の堀は落葉に埋もれて時押し移る六百年の

山の井に湧ける清水を竹筒に詰めて運びき生るる児の為

よどみなき軀のむかし物語山と川と土との匂ひす

冬至の海

蒲郡 岡本八千代

巡りこし一陽来復の愉しけれ遠方より来たる友ありてこそ

寺の前の海の渚に屯^{たむろ}してゐるゐる今年のホシハジロたち

「砂か沙か」言ひ合ひて佇^{すな}つ沙の上ここよりは伊勢の遠島は見えず

足元に寄する渚のさざ波も静けくよせてやさしくひきゆく

われらへとホシハジロ鳥歩みくるたつた一つがよちよちとして

白沙に寄する細波^{さざなみ}の影淡し今はわが友何をか思はむ

共に見る冬至の海の遠汐にあるかなきかのけふの島々

やはりくぐる南瓜のアーチ滅罪門を「罪滅ぼしなんてとうていできない」

「邑落^{ゆづらく}」とふ七里が浜よりの菓子届くまたまた点る心の燈^{あか}りが

冬空のオリオン星座をさがし見上ぐ今夜はただにうれしくなりて

霜柱

東京 今泉 由利

千個ほど地球を集む大きさの木星光る私の頭上

やさしさと鋭さとあり破壊音霜柱の上歩みゆきゆく

子規居士のありし昔は消えゆきぬ過去を知らしむ標識残し

日本と少し異なる形する大根人参千六本に

向ひ合ふビルのガラスに反射して夕光届く私の窓

日本より十時間後に来れるとニューヨークの新しき年

極寒の空の青さにドアを閉じひと日を籠る地下のアトリエ

乳白色二片の骨を説かれつつ今人間の鎖骨と動く

宇宙なる小さき単位のフィグス粒子目に見えぬものに心を探す

急階段下りて地下のアトリエも満ち満ちならむフィグス粒子

注連縄^{しめ}

豊川 伊藤八重子

水の面の木の葉のごとく漂ひつ日日暮れ居^{にち}り八十余歳

くきやかに障子に写るさくらの枝子の犬山に目覚めて涙す

デイケアより送られ帰る西空に爛々もゆる夕陽を拝む

庭畑にどさつと落つる雪の量犬山の朝は一入寒し

コンパクトの固形白粉うしなへば老斑かくす術もなくなる

子が注文の四つ足杖の届きたり家族の前でこつこつと歩く

お手づから絢^なはれ師よりの注連縄ぞ忘れさうなりし正月が来る

従妹^{いとこ}より蜜柑は山程届けられ心も豊に正月を待つ

留守を守る老親二人に娘の声は「転ばぬやうに」「火に気を付けて」

戴きし賀状の礼を新年に暫^{やうや}く認む八十路を辿る

金の鯨

豊川 弓谷 久子

来年も生きゐる証し細ぼそと書き続けるかこの日記帳に

文明忌開戦記念日舅の忌我の思ひの十二月八日

花陰に嘆きはながしと歌はれき文明忌なりダチュラ剪り伏す

十六歳の誕生日祝ひしその夜をみさと同じ部屋にて眠る

月に近き高層ビルに泊りゐて皆既月食遂に見られず

孫と子に続いて入る大手門名古屋城なり心弾みぬ

思ひ来て今日は仰ぎぬ青空にキラキラ光る金の鯨

打ち身より一月たちぬ薄紙を剥ぐ様にと言ひし母を憶ひぬ

風寒きクリスマスなりモンブランを子と分け合ひて味はふ今宵

なつかしき音と聞きをり雨樋を雪解け水のチロチロ走る

うちの子と呼びてパン屑置きてやる今朝も寄り来る三羽の雀

棚雲

伊丹 青木玉枝

裸木の間に冬の陽を受けて芽生えし雑草われをたたしむ

わがまきしパンを雀は食べ終へてわれ一人残し飛び立ちゆきぬ

鉄平石の徑に紅敷くれないきつめて山茶花の散る今朝のわが庭

試歩つづく吾れを追ひ越しカラカラと空缶あき風に転がりてゆく

冬の日のうすき幾重の棚雲に夕焼け淡く暮れてゆくかな

またビルがビルの向ふに建つらしく部屋より見ゆる起重機の先

八十年三河の海に三河訛り育ちて今は伊丹に老いゆく

ほほ笑みて穏やかなりしわが妹の写真は夫の仏前の隣

山茶花と椿のちがひ思ひつつ幾曲りしても垣根のさざんか

師走月も終りに近き星空を見上げついたらだちもすぎてゆく

皆既月食

豊川 内藤 志げ

見霽かす田は天災か人災か枯れ草続く東北海の辺

津波後に採れし牡蠣なり門前に友と並びて立喰をせり

ゆつたりと最上川の舟下り櫓を漕ぐように舟頭の唄

畑の径視線を上げて歩みゆく吉祥山は紅葉斑に

十一時半纏まとひ庭に出づテレビにて知る皆既月食

物干に掴まりながら空仰ぐ流るる雲の切るるを待ちぬ

真丸の白き大きな月眺め西陽の中を市場いちばより帰る

巨き月黒き模様を話しつつ市場の帰り一五一号線を

クリスマス夜の食卓賑やかにただそれ丈のわが家のイブは

大根の葉に積りたる雪の嵩言ひ合ひながら葱を束ぬる

白南天

豊橋 胃 甲 節 子

白南天も大房となり重たげに撓ひて日々の吾が目揺らく
肩の荷を下せし如く妹の病氣は治ると信じ受話器置く

風強き街に住み居て箒持ち道路に出でも舞ひ舞ふ棕の葉
吹きすさぶ風に舞ひ散る棕の葉を半ば諦らめ又掃き寄する

食べ易く爽やかな味千枚漬は弱き齒にても美味しく大好き

入浴は駄目と主治医に止められて忠実に守りて喀血無き九ヶ月
足だけを浴槽に入れかけ湯して柚子の香りに胸満たさるる

高齢なれば音信無くば病み居まさぬか便りも絶へて吾も書かざり
秋彼岸に播きたる花苗移植する苗戴きてより三年続けぬ

三日間午前と午後と少しづつ家のめぐりの草刈剪定

孫三人

豊川 安藤 和代

大根を間引けば青虫ころり落ち生きる為には生きる技あり

小さきは小さきなりに蒔蕨草根もとに紅をやさしくさして

子育てと同じ心で見る苗の小さき苗程堆肥増しやる

北風の強き今日の菜園はみーんな同じ南へ傾く

孫三人ブロッコリーにたつぷりのマヨネーズかけホリホリと食む

弁当にブロッコリーの色のさえ玉子焼き横にそつと添えれば

丸き葉は丸き形に虫は食ふちぎり紙した色紙のごと

青虫は隠れ上手よ葉脈の窪みにじつとすましたポーズ

風呂吹きの大根に湯気ホワリ立ち柚子味噌胡麻味噌からしが並ぶ

豌豆は支柱はずれて伸びておりとなりの蔓とからまりながら

ふる里を思ふ

岡崎 林伊佐子

庭に山に実生に殖ゆる南天の朱実が夕陽に輝きて照る
熟したる冬苺の実を摘みて行く山道もはや霜柱たつ

いつしかに雀鴉の姿みぬ廃村となりし古里おもふ

人住まぬ隣家の屋根の深霜が山より出でし朝日に輝く

梅檀の冬実を野鳥が食ひこぼし雪解けの道に黄金に光れり

鋤を持つ手を休ませて群雲の行方みて立つひとりの時間

収入など係はりもなく多作する野菜は自給自足となりぬ

林道に穂草の空穂が雪のせて耐ゆるがに立つ師走の散歩

霜柱ふむ音つたふ野の径のこのひとときを吾はたのしむ

古里に越冬をする巨き鯉師走となりてかしら寄せあふ

雪かぶる

東京 佐藤 喜仙

雪かぶる白馬連峰その下に集落二十戸肩寄せあひて

早春の山の斜面にかたかご咲くギフチョウ羽化し蜜吸ひに来る

田植女の棚田に苗を植ゑたれば雪の山々田水に映へし

蔵人の歌ふしこみ唄聞こえる利根の河原に尾花の揺るる

武蔵野のほぼ真中なる平林寺柿葉を落し青空に映ゆ

落葉焚かこむ輩に割り込める雪眉の人の恋ひとくさり

地平線朝日で赤き那須野原今だ残れる街のともしび

白鳥に代掻き馬の姿見て今年も棚田水張り初むる

山茶花の白き花卉のその中に陽光吸ひて蕊光りをり

五箇山の合掌造りの和紙の窓開くれば外は白銀の景

歌劇

豊橋 伊与田 広子

天皇の誕生日なれどわれにては母の命日氣持は複雑

テレビにて歌劇ドンジャバンニ見入るなり歌の技術に興味あるなり

バレンボイムミラノスカラ座の指揮をするわれの知らない若き歌手ばかり

わが世代活躍せし人次々と消へて行くなり淋しかりけり

何処見ても世代交代わが時代過ぎ去りて行く淋しかりけり

海からは離れているも海水は低き低きへと流れ行くなり

東海地震起りたればどうしよう考へたりて夜も眠れず

わが家を建つるに盛り土したるなり一階天井三米あらむ

地震だと右往左往と逃ぐるより二階に上がれば良きかとも思ふ

わが一生東海地震起らじとわれは願ひぬ祈るばかりなり

櫟^{いちい}

春日井 清澤 範子

賑わひし足助紅葉の香嵐溪照明消へて師走に入りぬ

八王子神社の境内に踏み入れば団栗数多吾が足元に

隣り家の紅葉落葉はカサカサと風に運ばれ吾が側溝に

日の暮れは早く雨戸を締める時夕焼まぶし師走の一日

冬至にて早や夕暮れとなりにけり真赤な夕陽吾を照らすも

櫟^{いちい}の垣根に赤き小粒の実が付きたり含めばほの甘き味

吾が夫の手術をしてより半年間医師の指示にてコルセットを外す

クリスマス過ぎて年末商戦の売出しに心急^せくまま吾も加はる

店内に「お正月」の曲流れレヂにて長い列に並びぬ

小さき丘崩され一面ひろびろと細長き窓の家建ち並ぶ

明日を夢みて

大阪 伊藤 忠男

こたえるは声なき声と誰云へぞ声あげ声を届けるが先
燃えるのも冷めしも早し大阪のおばちゃんの声響き渡るや

大阪の活気占う黒門の競り売り声が気になる晦日

この年も残るは僅か目指す夢明日に明日にと先送りする

荒れに荒れ耐えし耐えたし昇り竜払い浄めて新しき年

冬に咲く希望の光ルミナリエ照らすか瓦礫積まれし村に

暗黒が見えぬが故に中見たし何があるのかブラックホール

いつの日かタイムマシンに乗りし夢夢広がるか幼き頃の

過去と今隔てし壁が「時」ならば越えしその日は夢の夢なり

過去は過去消えぬものとして今がある今を悔いなく生きてこそあれ

師走入り

名古屋 近藤 映子

師走入り夫を訪ねどわが夫はりハビリ後の疲れいねむり
夫訪ねテレビをつけて共に聞く左手握手に力のつたわる
シヨボくと師走始めの雨空は灰色雲の厚く降り来る
良く晴れし師走の高き青空に白雲フワ／＼ちぎれ動きぬ
ベランダの片隅にジットしている亀二匹室内水槽に入れて動きぬ
わが夫のもう着ぬ衣類捨て切れず今年も師走過ぎゆく
久々のこの八階のリビングにダチュラの香りほのかに
夫見舞ひ今日クリスマスイヴと耳元に話し掛けたり
穏やかな夫の顔見て吾も又帰りて来たりおだやかな気持にて
師走早や行く年と成り夫見舞ひ来る年も無事に行こうねと

姫街道

新城 半田 うめ子

犬も猫も嫌ひと言ひつつ追ひまくりふりかけ居りき殺虫剤を

今日は何ごとならむ喜びてからすがさわぐ杉林の中

わが裏の雪もちかずら屋根迄も伸びにのびたりさわやかなりぬ

浜松のいちよう黄葉を眺めつつ温泉へと向ふ姫街道を

日の暮れて吾は行くなり夕食を友と楽しむ店のあるなり

茶器も仕舞ひ忘れて返済無く茶の湯の友は命終りし

ふらふらとすると言ひつつわが友は入院したり淋しかりけり

幼き日学用品を吾の為多くを求めもち来てくれし

やさしもよもちて来たりぬ岡崎よりわが好みなるみたらし団子

白鳥

島根 金津 文枝

安来市上空白鳥の編隊人生初めて美しく見仰ぐ

誕生日近づく九十一才白鳥の編隊感激人生捨てたもので無し

白鳥の美し編隊弓なり間隔素晴しさに驚き涙

三男運転車に乗る我の上空白鳥真下より見仰ぐ嬉しさ

かれいが浮いて来たら嵐になると言ふ昔の漁夫の言ひ伝え

八幡宮の大木紅葉赤く赤く我が庭に散り美しく色どる

エリザベス・テラーの洋映画の好きな夫二人の幼な子と見に行きし遙かな思ひ出

故郷米子市方言訛抜け切らぬ友夫失いし年も終りぬ

十二月中旬県立図書館駐車場満車やっ一つ空き場所見つけし

白鳥の間隔の正しさ何時教えるのか教はるのか白鳥に聞きたし

湖 東

東京 北川 宏 廼

土つきの九条の葱の届きたりしるくも匂ふ京都が匂ふ

寒々と湖東のしぐれに濡れそぼつ安土城跡の番所のみじ

救急車のピーポ次第に高まりてはたと止みたりあとは静寂

亡くなりし雅子の娘に母はいふお母さんより綺麗になったね

朝五錠毎日のむは老いといふ宇宙に向かふわれの薬

カプセル

年末の図書館に行き久しぶりに師の「ハイエク」と「ケインズ」に会ふ

現役の肩書きなどはなくなりて切磋琢磨の同志となりぬ

津波にて町飲み込まれゆく映像に「仮想」バーチャルと「現実」リアリティ境をもたず

仮設住宅逃げて来る人逃ぐる人危ふき距離の仮設住宅

自らの心と書きて息といふ元旦の朝深き息する

向ふにも

蒲郡 杉浦恵美子

忘れたい忘れたくない夫のこと思ひは揺れて一日暮れぬ

西陽差す此処は犬山寂光院遙か彼方に名古屋のビル群

遙か彼方名古屋ビル群シルエットその向ふにも夫は居ぬのだ

遥々と尾張犬山寂光院紅葉見るため訪ね来たりぬ

時折の時雨にフードの庇立^{ひさし}てガイドに遅れじ黙々^{ひそひそ}と行く

上離宮の我が目の先に飛ぶ鳶のそのまた先は京の街並

侘びしさを抱へ眺むる彼方には京街並といにしへ重なる

急ぐとて待つ人もなき家なれど釣瓶落しに心急かるる

大掃除とつくの昔に済みました独り居なれば汚れても居ぬ

手作りのお節料理を夢みても喜ぶ顔はもう見られない

究極の夢

豊川 堀川 勝子

一面に柿落葉しく冬枯れの蒟蒻畑は今収穫の時

逞しく伸びるしキウイの裸木に巢作り半ばの巢の残り見ゆ

アンスリウムの紅き花保ついく日か日の射す窓辺へ今朝より移す

広げ干す「芋切り干し」を狙うがに今朝も来鳴きぬわが庭すずめ

窓ガラス拭きつつ眺む目の下に新築屋根の黒き色冴ゆ

新築の家に老い母招き寄せ共に暮らす吾が究極の夢

家成りてはじめての冬迎ふるに壁面ばかりが目立つ我が家

庭覆ふ桜紅葉も散り尽くし厨に深く冬日射し来ぬ

庭覆ふ桜紅葉も散り尽くし落ち葉掃き寄す楽しみ終わる

冬至の日の柚子も南瓜も穫り貯めし畑のめぐみに心豊けし

柚子

豊川 小野可南子

鈍色の空に兆せる青の色夜来の雨も止みてゆくらし

本宮山の姿さやかに見えはじめ登りたしいつかいつか今一度

林なす桜と公孫樹の紅と黄夕ざす光の華やぎのとき

反す光^{かえ}なくて今宵の月は赤欠けはじめたりおぼろおぼろに

欠けてゆく月の周りの星々のこの明るさよこの輝きよ

千尋弾くサクラサクラに和してをり己がソプラノに少し酔ひつつ

終の葉の四五枚ほどは枝にあり猩猩楓の極まる紅葉

アヴェリアの垣の下蔭に動きあり何鳥ならむ何をつひばむ

音羽川の引き潮波のたぎつ瀬に凜^{りん}として立つ一羽白鷺

柚子浮べゝ冬至冬なか冬はじめゝほっこりとしてわたしの夜は

大豆の莢

豊川 山口千恵子

暖かに冬の日あるねし村の墓地線香の煙しづかに立ちたつ
座りたる畳はひんやり冷たかり加子母村の芝居小屋
掘り起こす土塊の中に細き蛇その舌長し赤あか伸ばす
黄葉する葉もいつしか散りはてて転作田の大豆稔れり
立て掛ける大豆の束に冬日さす時折莢のはぜる音する
冬の日のあまねくてらす庭の辺に束ねし大豆の莢はぜる音
朝の日のぬくぬくさし込む玄関に蓄つきたりゼニノナル木
南天の赤き房実の輝けり穏やかに冬の朝日さし来ぬ
やはらかに出揃ふ青き小麦の芽休耕田に冬の日そそぐ
弱々と淡き緑の小麦の畝うね師走の風の吹きてゆらせり

山の辺の道(1)

豊川 夏目勝弘

京の果て京終駅きやうしゆうえきに降り立ちぬ先づは昼食ラーメン屋しかない

側溝のせせらぐ清しき流れに沿ひ山の方へと歩み始めり

枯れ草の色に清しき三笠山目に捉へつつ紅葉の下道

家持ら万葉人の歌にせし三笠の山は冬青の下

綿綿と千有余年かはりなし能登川細し黄葉を映し

鹿野園ろくやおんにかけてつづく家並のなか歩み残せし山の辺の道

高田の山野をかけて狩せしや季をりをりの草木めでつつ

白毫寺あたりにありしや離宮とつみやは高き石段の下に着きたり

帽子とり汗ぬぐひつつ石段見上ぐ丈ある草のもみづる一本

石段を狭めて枝垂るる秋萩に黄葉もみぢば少なし霜の降りしか

ジャングルジム

「招待」 秋山逸穂

グラウンドに石灰の線ひいており歪みいくつかあれば親しき
かもめ飛ぶ真澄の空を仰ぎおり埠頭に寄せる波音のなか
芝草の枯れゆく公園歩みたり雀のさえずりにぎやかに聞く
何十年のぼったことなきジャングルジム思い出以上にはるかに高い
川霧のわきたつ淵辺にかがやける土盛り上げて霜柱があり

横浜 阿部 淑子

ひととせの祝い迎えし仲間たちやさしい微笑安らぎ増せり
ウワーきれいいい色だこと庭草の季節の移ろい愛でしDVD

豊川 白井 信昭

竹島橋長き渡りに満ち潮の明るき朝の空気清しい
枯れしもの手繰り寄せをり地境のフェンスに延びしひと夏の蔓

『いっしょよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

昨夜の風に落ちてしまひぬ花梨の実たった一つの残りゐし熟実

三田美奈子

定刻に夕刊配りのバイクの音夕餉の仕度はおでんにするか

稲吉友江

石垣の角を曲がれば松山城確かに天守は「秋より高き」よ

鈴木美耶子

再再に六角堂へ来たりけり朝の観音様にわれは拝む

吉見幸子

いにしへの貴人も武人も隠りゐしこのみ吉野に一夜宿りぬ

牧原正枝

鳳来寺の参道を今年も歩きをり紅葉と混ざる小さき山柿

岩瀬信子

秋深しつるを自在にからませてクレマチスの白二輪開きぬ

石田文子

朝明けの満月白し西空に霜月の風ほのか吹きくる

山崎俊子

「俳句」

苔寺の苔灯しをり冬紅葉

植村公女

時雨傘さしかけて見し野の仏

存在のほのかな重み花八ッ手

寒空や刀のやふな月がある

一石

初日の出焦らすかのやふ雲かかる

風雪に耐えて新芽の育ちをり

枯れ菊のくくられてなほ風に揺れ

佐藤喜仙

極月や沈金の椀洗はれて

山茶花や広き屋敷に婆一人

何もかも忘れてゐたい白障子

皓一

橋下に口を寄せ合ふ冬の鯉

寒ければ寒さの話ばかりなり

和歌から派生した季語の本意（その十九）

「かさね」「笹」 佐藤喜仙

54 立春（春立つ・春来る・立春大吉）

「ひさかたの天の香久山この夕べ霞たなびく春立つらしも」

柿本人麻呂（万葉集）

「み吉野は山もかすみて白雪のふりにし里に春は来にけり」

摂政太政大臣（新古今集）

春最初の二十四節気の節にあたる。新暦の二月四日ごろ。

この日から暦の上では春になるが、まだ寒さは厳しいながら、日脚は伸び木々は芽ぶいている。尚「寒明」という季語があり、立春と同じことだが寒明けは長い冬から解放されたという感慨が強くこめられている。

例句

春立つや誰も人よりさきへ起き

鬼貫

落葉焚いて春立つ庭や知恩院

虚子

立春の米こぼれをり葛西橋

波郷

55 葦（葦すみれ・葦野・葦摘む）

「春の野に葦摘みにと来しわれぞ野をなつかしみ一夜宿にける」

山部赤人（万葉集）

すみれの名前は、花を横からみると大工道具の墨入れに似ているところからきていたといわれている。山道の片隅にひっそりと咲くさまは、可憐で、慎ましい。スミレは種類は多いが、一般的には濃紫色の花のものを指すことが多い。

例句

山路来て何やらゆかしすみれ草

芭蕉

黒土にまぎるばかり葦濃し

誓子

すみれ植う父子や髪をふれ合はし

綾子

56 陽炎（糸遊・野馬・陽焰・かぎろい）

「東の野に炎の立つ見えて返り見すれば月かたぶきぬ」

柿本人麻呂（万葉集）

雨降りのあとなど、水蒸気が地面から蒸発して上昇して行くとき、空気がかなりかきみだされ、それを通して遠くの物体が浮動して見える現象を云う。

例句

ちらくと陽炎立ちぬ猫の塚

漱石

かぎりへる遠き鉄路を子等がこゆ

多佳子

陽炎につまづく母を遣しけり

耕二

贈呈誌 十二月号

「秋楡」

かくてまた今日はしまれり明けそめし屋根に鳥たち歩く音する

三宅 千代
白川 あや

夫と行く光堂への坂道は遠き日のごと秋雨しづく

「愛媛アララギ」

干潮より満ち潮となる暫しの間あやしきまでに海のしづまる

浅野 次郎
高津 明児

幾十年かけて蒐めし我が蔵書を捨つると妻の束ね括れり

「鹿児島アララギ」

咲き残るホトトギスの花風にゆれて黄昏侘し今日は立冬

増田 教子
堀之口 ふさえ

乗り次ぎの五六時間つくねんと吾がかしこまり居るほかはなし

「高知アララギ」

傷づきし人羽包みしこの猪野々囲む山々に霽のなづさふ

楠瀬 兵五郎
藤田 信宏

色ふかく未だちひきギリギリス吾が指先を高く跳ねたり

「滋賀アララギ」

花菖蒲年々咲きて十二年癒えしよろこびに購ひたりき

内林 加奈恵
榊原 春司

歩行器に縋り室内移動するかかることにも疲れ果ており

「冬雷」

川又 幸子

十六夜の月は巡りてベランダに柵の影おく日付け変りて

小林 芳枝

犬が鳴きバイクが過ぎる夜明け方鴉のこゑは一遍とほく

「柗」

勝木 四郎

つづまりは平凡がよいと言ひましき最晩年の吉田先生は

吉田 純治

茶碗持ち飯をいただくよろこびが今全身によみがえりけり

高橋 宗伸

何もかもなべて失せゆく思ひあり高く澄みたる秋空見れば

佐藤 嗣二

吹く風に秋を感じて出で来しか灼くる舗道に動かぬ飛蝗

「檜の木」

朝比奈とよ子

手を通さず逝きにし夫の甚兵衛を寸法詰めて湯上がりに着る

塚本 明夫

波の間に漁する小舟ただよひて竿さす人も松のまに見ゆ

松井 花子

「穂の原」

田中 浄子

いにしへの掟読み居り新居の閑所この小春日の陽の揺るる館

歴史ある千有余年の時を越え緑ありてこそ本堂に座る

「朝の川」

井野佐登歌集

朝の川渡りつつある五十歳代思ひもみざりし院長として

眠らざる夜の続きの朝まだき昨夜の予報の雨降りいだす

早の早めに便秘の薬を使ふべし睡眠薬も早め早めに

私の一首

政庁の跡地はなれて山裾を明日香の里を歩む思ひに

夏目勝弘

奈良より、海路三十日、陸路二十七日の筑紫に国防のための政庁を造った。その地の風景は、都周辺の景色と同じような所を選んである。

旅人、憶良、防人らの歌を思う時、どうしても現地に来て見たかった。

現状は変化していても、風土とそこに漂う空気に想いを巡らせ、作者の止むに止まれぬ思いを感ずることが出来る。そこに短歌の原点があると思うっている。

そら豆に似たる小蛙高砂百合の花に宿りて今朝も動かず

弓谷久子

手入れをしない我が庭には蛇もとかげも蛙も住みついていてみんな小さくて可愛い。

雀も日毎パン屑をねだりに来て早朝からやかましく啼く、殊に蛙は小さくてそら豆に色も形も似ている。葉にとまれば見分けがつかない。都会では考えられないと思うが自然の中でこの小さなもの達と同居の生活もいいものだと思うこの頃、時には話しかけて見る。

だんだんと小林一茶の心境に近づくようだ。

川原を少しづつ足伸ばしゆく足音に河原撫子の一群ゆるる

青木玉枝

伊丹に住み五年、マンション暮らしには話す人もなく蒲郡がなつかしく、それでも山陰地方への一人旅を楽しむにしていたのに、足萎えになり歩行も思う様に出来ない現在、試歩が私の日課となり七階のバルコニーより猪名川神津大橋を眺め川原めざしボツボツの歩み季のうつり変りを身を感じ秋の気配を川岸に立てば河原撫子を一群見つけ秋の七草を数へつつ私も伊丹を愛し残生を自分を考へ来年は九十才これからも試歩を続けたく心に誓いました。

孫の蒔きしラディッシュは今朝みづみづとサラダに入り食欲そそる 安藤和代

中学一年の孫娘が学校のラディッシュ観察で蒔いた種の残りを自宅のプランターに蒔きました。毎朝水をやり日に日に成長し二十三日目そつと抜いた先は真紅でまん丸に育っていました。朝孫の作った野菜サラダは緑のレタス胡瓜にラディッシュの紅がさえ暑さで衰えた食欲を元気にさせてくれました。「私が蒔いて作ったのだよ」と娘は低い鼻をピクピクさせ、兄は「すごいねひなちゃん上手じゃん。」いつになく賑やかな朝食でした。

嵐去り爪跡残る秋の里とぎれとぎれの虫の声あり 伊藤忠男

ある日私は豪雨に遭遇した和歌山の日高川を訪れ老婆に会った。「あのときは怖くて足がすぐみ動けなかったわさ」と語る。その目にはあの恐ろしさが蘇っていた。そんな中でも秋の虫たちの鳴き声がどこからとなく聞こえてくる。どうしてもこの難をのがれたのだろうか。ほんの微かな物音でも、鳴く声を止める。棲家を失った虫たちの恐怖心を誘うのだろうか。人だけでなく、虫たちにも被害を与えていたことに、心痛めたある日のことだった。

海苔巻きは巻きて直ぐ食ぶるが旨きなり海苔のかほりの豊かなるうち 伊与田広子

これは私が一番寛いで食事の出来る時です。忙がしい時はちらしにし、もみ海苔をかけ頂いてしまいます。寛げる時は海苔を四つ切にし、冷蔵庫にある物を入れて巻きます。海苔のかおりと味がマッチして最高においしく頂けます。特にわさびを効かせたイクラの海苔巻、沙魚の甘露煮を巻けばおいしく頂けます。海苔巻は、巻いたら直ぐ頂くのが海苔の香を失しなわず最高です。市販の物では味わえないものです。巻いては食べ、食べては巻きます。

絹の話 (14)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

絹と皇后

昨今皇后様が養蚕をしているニュースが新聞やテレビで報道されます。大昔から行われている様に思われがちですが、その歴史はそんなに古いものではありません。明治4年からのようです。その頃、ヨーロッパ全域に蚕が死んでしまう「微粒子病」が蔓延していて、繭の生産が出来ずにいました。

アヘン戦争に勝利したイギリスは中国の絹を独占し、産業革命以後勃興する新富裕層の絹需要に応えようとなりましたが、衰えた清朝は混乱していて、充分絹を集める事が出来なっていました。（抵抗していたのかもしれませんが）列強はこぞってその需要を日本に求めて来ていました。日本は明治になる迄ずっと絹の輸入国でしたが、江戸時代後半から絹の輸入による小判、一朱銀の流失に困り、絹の輸入制限を強めていました。それが明治の時代になって功をそうするのです。不足する絹を補うため、いやがおうでも国内増産を余儀なく

されて、北関東から東北を中心に品種、養蚕技術の進捗が図られたのです。幕末から明治に至る政治的混乱の中にあっても、絹の生産は旧幕制の代官制度等そのまま使い、見事に生産と税収を上げていました。同時にヨーロッパに微粒子病に感染していない日本の蚕種が飛ぶ様に売れたのです。国内の蚕の卵が不足するほど売れていました。

この時、蚕業から簡単に収税するアイデアが考案されたのです。蚕の卵は紙の上に生ませます、この紙に印を押し、押印の無いシートを取り締まり、生産と税収の見通しが鮮明になりました。（印紙と云う言葉の始まりでしょうか）蚕業の生産管理と税収を一元化出来た頃が開国です。近代化を急ぐ明治政府はどうしても外貨を稼がなければなりません、旺盛な国際的需要を背景に国策産業を「絹」としたのです。

天皇が米を作られるのなら、殖産興業の為に皇后にも率先して繭を作って頂き、範をお示し戴きたいと云う事で、明治4年、明治天皇の皇后、昭憲皇后が宮中の吹上御苑で始めました。この時宮内省は教師役選任を大蔵省に任すのですが、

大藏省は武家の出身ばかりでどうしてよいのか分からず、苦慮していましたが、入省2年目、埼玉県深谷の養蚕農家出身で係長級の澁澤栄一に人選を任せましたのです。（これ以後澁澤は絹の発展と同じく出世街道を駆け上がって行くのです）

その人選は養蚕に長けた者が、世話方、奉仕者、養蚕方など職務に分かれて当りました。ところが明治6年5月皇居の炎上で蚕室も消失し、中断することになるのですが、熱意は衰えず同年6月孝明天皇の皇后、英照皇太后一行が6日を要して富岡製糸所を視察されております。明治12年英照皇太后は青山御所に蚕室を新築し、宮中養蚕が復活されました。それを当時皇太子妃であった貞明皇后（大正天皇の皇后）が受け継ぎ、今日に至っております。

古物の修理、復原、複製などに使われるピーナツ型の小さな繭「小石丸」もこの時からと云われております。

美智子皇后はたいへん熱心で、毎年40キロの小石丸を育てられております。今日の養蚕所は宮内庁舎の近くの紅葉山御養蚕所で家蚕を飼育され、大正初期から始められたと云われ

る日本固有種の野蚕の天蚕は吹上西通りにクスギの木と一緒にあると聞いております。日本野蚕学会会長（赤井 弘）もご説明にお伺いした事があるそうです。

一昨年皇后様は草津町の静養からお帰りの途中、天皇陛下とご一緒に、群馬県中条町の天蚕飼育の日本一の登坂さんの飼育所を訪ねていらっしゃいます。

このような事が写真入りで報道されるので、野蚕の中でも天蚕はよく知られる様になりました。小石丸は小さくて採算が悪いと戦後は飼育する人がいなくなりましたが、あやかりたい人が増え、新小石丸として再生産される様になりました。今日の日本では繭生産は急激に減少して、往時は40万トン生産し、世界の絹価格をリードして、国の財政に多大に寄与してきましたが、今は1千トンに満たなくなり、各種補助金等も無くなりました。皇后様が最後の繭生産者にならなければよいが、と思うばかりです。

これからの蚕業を短日間に親和性蛋白質を大量に作り、飼育し易い昆虫と捉えた時、素晴らしい未来産業が開けます。

絹の話 (15)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

絹と零戦

太平洋戦争の時の零式戦闘機（零戦）と云えば年配の方で知らない人は無いほど有名な戦闘機です。旋回半径が小さくて戦闘性に優れ、航続距離も長く、初戦のうちは向かう所敵なしで、操縦技術も優秀であつたので、米軍にも零戦乗りをゼロファイターと称して恐れられました。

彼等は真っ白なマフラーに厚いキルティングジャケット、短ブーツと云う出で立ちでした。その姿は多くの人の目に勇ましくも「かつこよく」見えたのでありましょう。若い女性ばかりか、若者にはあこがれの姿の様でした。夏でも、南方のラバウルでもこれを着用していました。当時の戦闘空域は3千メートル〜6千メートルが多く、暖房が無いので上空に上がると非常に寒かったのです。ですからあの衣装は必要欠くべからざる物だったのです。更に戦闘性能を高めるため防御装置も省略して軽量化を図っていましたので、当然操縦

士の衣服にも軽量化が求められました。絹は繊維の中で最も軽いので、マフラーに使われました。色は染める必要は無かったのです。絹は高々度でも凍結の心配は有りませんし、汚れにくく、抗菌性が強いので傷の手当てにも効果的でした。

当時の飛行機乗って3千メートル上空でどの位寒いか私の経験を話しましょう！昭和38年8月羽田から北海道の千歳の航空自衛隊基地まで、昭和16年製の米軍双発輸送機に乗りました。機内はジュラルミン1枚と骨組みむき出し、暖房無し、羽田の周りをチョット遊覧飛行と聞いていたので、半袖綿シャツ1枚着て乗り込みました。上空に上がって15分〜20分もすると体が次第に冷えて来て、寒くて体がブルブル振るえ、歯がガチガチ、外は見えず、爆音で会話は不能、首に石板をぶらさげて筆談した過酷な旅を思い出します。

気温は100メートル上昇すると0.6℃下がるといわれていますので、零戦の戦闘空域は夏でも17℃〜2℃位であつたでしょう。絹は急激な温度の変化がないので、血流を良くし、頭脳の働きと体の動きを柔らかくします。従ってシルクのマフ

ラーは有効な装備であったと思われます。

まだ今日でも白いシルクのマフラーに魅せられている人は時々います。デパート等で白のマフラーを販売していると、年配の男性から声をかけられます。どうなさるのですか？と尋ねると、幼い頃に焼き付いた戦闘機乗りの白いマフラーをしている姿が忘れられない、一度自分も白いマフラーをしてみたいというのです。

そんな姿に憧れて、予科練に入った人もいたのでしょうか。

戦時の絹といえば白いマフラー以上に沢山の絹布を使用したものが落下傘（パラシュート）でした。

パラシュートは絹で出来ておりました。降下する時、間違ひなく開かなければなりません、絹布はたたんであつてもさりと開け、もつれません。それを利用して作られたのです。インドネシアのパレンバン（油田地帯）降下作戦に利用されたのは有名です。ヨーロッパ戦線のノルマンディー上陸作戦の時、米軍は大量の降下部隊を動員しますが、シルクのパラシュートであつたのでしょうか、当時アメリカは絹が日

本から入らなくなつて、それに代わる物として、ナイロン繊維の研究が進んでいました。同じ様にさりと開きますので、それを利用したのでしょうか？

これが化学繊維の始まりです。今日では色々な化学繊維が出来て、絹100%の衣服は和服以外には殆ど見られない様になりました。しかしネクタイは勿論ですが、マフラー、ストール等はまだまだ絹100%が健在です。

戦後60余年、世の中の進歩は目ざましいものが有り、絹など日常では忘れかけていますが、昨年のアメリカのNASAの宇宙飛行士の下着に野蚕絹の物が採用され、実用されました。宇宙船外活動服も軽くてしなやかで宇宙線を吸収反射出来る野蚕絹を利用したジャケットが出来るかも知れません。

いつの時代も色々な物資が採算を越えて軍事的な事に利用されます。それが民需用品となつて世の中をリードして行く物が沢山あります。絹の知られざる機能性が開明され、それを利用した安全で機能性に満ちた品々が出来事を期待しております。

物理学者と詩歌の世界 (25)

一石

ジョージ・ガモフ

ジョージ・ガモフ (Georgiy Antonovich Gamov、ゲオルギー・アントノヴィッチ・ガモフ、1904-1968) は、アメリカの理論物理学者、天体物理学・核物理学者。帝政ロシアの黒海に面するオデッサ (現在はウクライナ領) で生まれたユダヤ系ロシア人。ガモフはソビエト時代の1922年にレニングラード大学に入学。在学中に膨張宇宙モデルの提唱者アレクサンドル・フリードマンの講義を聴き、大きな感銘をうける。同大学を1925年に卒業し、1931年に母校レニングラード大学の助教授となった。1933年にブリュッセルで開かれた国際会議に参加。会議終了後にガモフは帰国を拒否し、パリ、ケンブリッジ、コペンハーゲンなどで講義した。1934年に米国へ移住し、ジョージ・ワシントン大学教授に就任 (参考資料1)。

ある種の放射性原子核はアルファ線を放出して壊れる (アルファ崩壊)。福島第一原発の事故で一般にも広く知られる現象となった。この現象に対する理論的な解明を行なったのがガモフである。彼は1928年に初めて量子論を応用し、「アルファ崩壊は原子核の周りのポテンシャル壁をアルファ粒子がトンネル効果で透過する現象である」との理論をたてて、それまで実験的に知られていたガイガー・ヌッタルの法則を説明した。

また1948年に、ラルフ・アルファール、ハンス・ベーター (参考資料2) との共同論文で、宇宙の核反応段階に関する「 α (アルファ) - β (ベータ) - γ (ガンマ) 理論」を発表した。ガモフは、初期の宇宙は圧縮され高密度・超高温であったとし、宇宙の膨張の始まりは熱核爆弾の「火の玉」と捉え、創造の材料 (陽子、中性子、電子、ガンマ線の高密度ガス) が爆発の場で連鎖的に起きる核反応によって、現在の宇宙に見られる様々な元素に転移したのだ、と考えた (注1)。1940年代、ガモフとその共同研究者たちは、熱核反応によって創世が起きたとする説明の細部を詳細に描く論文をいくつも発表。この α - β - γ 理論を元にして「火の玉宇宙」というアイデアを発表し、ジョルジュ・ルメートルがアインシュタインの一般相対性理論に基づき1927年に提唱したビッグバン宇宙論を支持、その名残としての「宇宙背景放射」の存在を予言した。温度をもつ物質はすべて熱放射をしている。宇宙はかつて熱かったのだから、必ず熱放射をしていたに違いない、というのである。彼の予想値は絶対温度で5 Kであったが、当時の物理学者の多くはまともな説とは考えず実際にこれを検出する努力はなされなかった。1965年に偶然に約3 Kの宇宙背景放射が発見され、この学説の正しさが認められるようになった。こうして20世紀の最大の発見の1つビッグバン理論が生み出されたのである (注2)。

ガモフにはもう1つ「生命科学」への特筆すべき貢献がある。1954年、DNAの構造がジェームズ・ワトソン、フランシス・クリックらによって解明されたあと、タンパク質が生体内でどのようにコードされているかを明らかにする

必要があった。DNAに関しては全くの素人であったが、ガモフはその仕組みについての興味深いアイディアを提唱した(参考資料3)。

50年代以降、ガモフは一般向けに難解な物理理論を解りやすく解説する啓蒙書を多く著している(注3)。彼は1956年にコロラド州立大学教授に転じ、1968年に64歳で急死するまでコロラド大学で教鞭を執ると共に著作を続けた。ガモフは祖国ロシアで「アカデミー会員」として復活している。

強烈な個性の持ち主だったガモフの言葉から(参考資料4)。「私は実験物理で博士号を取ることにした。実験家には研究室があり、そこにコートもかけられる。ところが理論家と言ったら入口でコートをあずけなくてはならないのだから。」実際の人生では理論物理学者として活躍した。

宇宙空間の膨張が全方向に一樣なら、観測者がどこの銀河系にいても他の銀河はその人からの距離に比例する速度で遠ざかっていくように見えるはずだ。

原子の創造までに1時間もかからなかったが、恒星や惑星は数百万年かかった。だが人間誕生までに50億年しかかった!

○「またガモフ節が:」。ガモフが新しい論文を発表したときのW・ヴォルフファング・パウリ(参考文献5)の発したジョーク。

注1…この理論のちに京都大学の林忠四郎によってその中の一部の誤りが指摘された。林によって誤りが訂正されたので「 $\alpha-\beta-\gamma$ 林の理論」と呼ばれることも

ある。

注2…ガモフは、1945年の原爆実験の映像を見て強い印象を受ける。原爆が爆発する瞬間、高温の火球が形成され、そこから衝撃波が周囲に拡がっていく光景から宇宙創造の瞬間へと思いを飛翔させたのである。1946年の論文で、彼は、宇宙が大爆発の火の玉状態から始まったとする学説を提唱。著書『宇宙の創造』で「この原子核料理のはじめの時代、それは1時間以上続かなかつたに違いないが、その時代の宇宙のいたるところに存在した条件というものは、爆発しつつある原子爆弾の中心部に極めてよく似たものであっただろう」と書いている。

注3…『太陽の誕生と死』、『地球の伝記』、『宇宙の創造』、『不思議の国のトムキンス』、『原子の国のトムキンス』、『生命の国のトムキンス』、『トムキンスの冒険』、『続・太陽の誕生と死』、『宇宙』1、2、3…『無限大』、『数は魔術師』など。

参考資料

- 1) フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』、『ジョー・ジ・ガモフ』
- 2) 三河アララギ、p 36、第58巻、第12号 (2011)
- 3) American Treasures of the Library of Congress REASON, (DNA: An "Amateur" makes a real contribution).
- 4) http://en.wikipedia.org/wiki/George_Gamow
- 5) 三河アララギ、p 36、第58巻、第3号 (2011)

斎藤茂吉と御津磯夫 五

「月虹」 鮫島 満

「磯夫の茂吉詠」を続ける。

わがために茂吉歩みき引馬野の文字ふかくいま石に残さむ
昭和四十二年『黄素馨の門』

昭和四十二年十月、引馬神社境内に引馬野碑が建立される
ときの歌である。「引馬野の文字」は茂吉筆。裏面の考証が
今泉忠男（磯夫）の筆によることは、磯夫の、「茂吉筆の引
馬野碑に副ふるを書きくだす診療寢室に唐紙を展べて」によ
ってわかる。磯夫は茂吉が書き残していた文字を深く彫るよ
うに関係者に頼んだのであろう。この年、磯夫は、「引馬野
を三河の御津と呼び来つつ四十年にして石文の建つ」「引馬
野にわれは生れて引馬野に建つ引馬野の碑はわが墓標」とも
詠んでいる。この碑は、研究者や学生が見学に来るようにも
なり、磯夫はのちに、

引馬野碑の茂吉の文字を指したまふ伊予宇摩の郡よ
り人は来りて
昭和四十九年『わが冬葵』

と詠んでいる。あるときは、「引馬野はここ御津なりとまた

もいふＴシャツジーンズの女子大生に」（昭和五十二年）と
も詠んだ。

万葉集巻一「引馬野ににほふはり原いりみだり衣匂はせ旅
のしるしに」の「引馬野」を古くより遠江の曳馬村とする説
が有力だったのを、誰よりも早く三河の引馬野であると考証
したこと、これが広く認められたことは磯夫にとって忘れら
れない勲章であった。このことは、年を経るにしたがって磯
夫の中で大きくなってゆき、以後多くの歌に詠まれてゆくこ
とになる。

引馬野考つづりゆきしも思ひしむ鴨山考にさきだつ
一年
昭和四十三年『黄素馨の門』

今泉忠男（磯夫）が「引馬野考」を東京慈恵会医科大学文
芸部発行の『醗酵』第十七号に発表したのは昭和九年五月
であった。茂吉が、昭和八年ごろから本格的に研究を始めて
いた人麿に関する論考の第一冊『柿本人麿』（鴨山考補註篇）
を岩波書店から刊行したのは昭和十年十月であった。右の一
首はそのことを回想しているが、三十四年も前のことながら
感慨の深いものがあるのであり、それが「思ひしむ」の一語
にこめられている。

茂吉の『柿本人麿』は昭和十五年までに五巻の刊行となり、
茂吉はこの業績により昭和十五年五月には帝国学士院賞を

授与され、宮中において研究の内容を語った。

磯夫はこの年、「いにしへもあひ諍ひきいまわれのきはめ
は三河御津の引馬野」「遠つあふみ曳馬をさきに疑ひき菅江
真澄を二三日おもふ」「かくれつつ貶しめぬしもあるらしく
久しくなりぬわが引馬野御馬説」とも詠んでいる。

萬軍といへる未刊の歌集ありてまだ見ぬ記念館に展
ぐとぞいふ 昭和四十五年『アカンサスの径』

茂吉が第二次世界大戦敗戦直前の昭和二十年七月にガリ
版で発行した歌集『萬軍』を「未刊の歌集」と表現し、これ
が、昭和四十三年に茂吉の生家近く（山形県上山市）に開館
した、まだ行ったことのない斎藤茂吉記念館に展示されてい
ると聞いている、という内容である。この歌集は昭和六十三年に紅書房から活字版で刊行された。解説を書いた柴生田稔
でさえもこの歌集の存在を知らなかったという。

留学の子を思ひつつわれはまた古りし遠遊遍歴を讀
む 昭和四十九年『わが冬葵』

海外に留学中の子供のことを思いながら、茂吉の留学中
の作品を収める歌集を読むというのである。茂吉の第四歌
集『遠遊』は大正十一年から同十二年までの歌を収めて昭和

二十二年に、第五歌集『遍歴』は大正十二年から同十四年ま
での歌を収めて昭和二十三年にそれぞれ刊行された。

「つきかげ」をいくたびいまに読みつづけわが時少
なしただ真似をする

昭和四十五年『アカンサスの径』
模倣の集積ありて創意ありわれはよみに読む茂吉文
明 昭和四十九年『わが冬葵』

子規の写生まことに受けて左千夫また茂吉文明の写
生を信ず 昭和五十五年『かうしんばら』

一首目の『つきかげ』は茂吉最終の第十七番目の歌集。結
句の「ただ真似をする」、二首目の「模倣の集積ありて創意
あり」、三首目の「写生を信ず」に、長年拠ってきた作歌上
の信念が詠まれている。

『つきかげ』の一首の本歌取りに、

つきかげの一首を盾にわれもいふ人訪ひ来るは至極
害がある 昭和五十八年『月下の華』

がある。

これは、茂吉の「活動をやめて午前より臥すときに人の来
るは至極害がある」に拠った、ユーモアをもつ歌である。

「氷魚」のことから (133) 岡本八千代

もうすぐ平成二十四年になる。――。

今、この師走は司馬遼太郎の「坂の上の雲」の第三部がテレビに上映されている。もうここには子規の生きた姿はない。日露戦争の中の秋山兄弟を中心とした。軍人、兵士たちの尊い命のはかなさ、空しさ、がクローズアップされている。と同時に戦争否定の心が動く。

しかし、私は、この映画の初めと終りに映し出される、坂の上の石ころの白い道に感動してしまう。その白い坂道を上りつめた処に、ずっと雲が動いている。そして、その雲の中から日の光がさしてくる。――。「女はどう生きていったらいいのか？」を思う。

さて、今回からは子規の小説「当世媛鏡」について書いてゆくことにする。

まず、登場人物について。

○入谷の片里に片間千之丞と云う人がいる。その人の妻の名はとよ。二人の間に清という娘があった。その時五歳くらい。

とよは娘を残して亡き人となる。現在は、下女のあさと、老僕の八十兵と暮す。

○片間の縁者、(小石川のほとりの家)がいた。主人は小萩昌之助という。妻の名はためという。二人の間に才吉という七歳になる子供がいた。

○金貸の河瀬山次郎が途中から出てくる。

○浅草の観音様でお清と出会った人。中谷豁という人の名が出てくる。

○大磯の「諸越樓」の旅宿の下女大將のお瀧さん。

○糸井作太郎という人。一夜の宿に出会った人。

○ある男、年頃三十許りと六十餘りの老婆。

○ピアノのある部屋の主中谷たく子さん。

○山室という人。

など登場する。

一応、名前をあげてみたが、果してそれらの人々がどのようにつながってゆくのか。子規の小説は前回の木田君の話(「日物語」)のように、今回もややミステリー的な風に展開してゆくように感じとった。

この「当世媛鏡」は、「小日本」に明治二十七年六月十五日から七月十五日まで、三十一回にわたり、一日の休載もなく、発表されたのであった。子規の小説としては最長編であるといわれている。

子規は「もう小説は書かない、詩人になる」とまで言ったけれど、俳句仲間を集めた会では、「山会」という文章会を催したりしていた。名前は「山会」だから何だろうと思っただが、文章会のこと、どんな文章を書くにも「山がある」、つまり、クライマックスをどこへどう書いてゆくかと勉強会を開いていたのだった。

子規は、ほんとうは小説を書きたかったのだと今も私は思っている。

ことのはスケッチ (398)

今泉 由利

「カウントダウン」

私の年中行事、ニューヨークでの年末年始に向け、慌しく飛行機に乗る。

慣れているとはいえ人工の空気、気圧、長時間の抑圧…の飛行に耐える体力作りに励んだ効果があるかな。このごろは、ニューヨークまでに浴びる放射線の値までわかってしまったから、地獄にいるような気持ちにもなる。飲みかけの水のペットボトルが、ペチャコンコになるのが空恐ろしい。

『女の子が世界で自分の力で生きてゆく』という方針で育てた私の子供達の選んだ生活の場ニューヨーク。

『とても住めないと思うてしまう、私と掛け離れた感覚のところ』ここで働いている子供達がいじらしく、せめて時には近くにいてあげたい。

朝から、寒さも厭わずタイムスクエアに集まってくる人、人。救急車、パトカー、警備の人人。囲を作るための冊が並べられ：尋常ではない騒動になつているのが窓から見えている。

これとは別の子供達流のカウントダウンの場合は、1907年に建てられたホテルのバー。

ピカピカ光を放つティアラ、2012年の字のメガネ、トンガリ帽も鳴物も：もちろん私も皆と同じピカピカ光らせて。

ここに集ったのは、シリアから引越してきたばかりのラーニヤ。彼女は、暴動で殺されかかっていた犬を常に連

れている。この日のためにスーダンからとんできたレイ。

ニューヨークで働いているスペインの子。日本からボイストレーニングにきている日本の歌手二人、そのマネージャーが二人。私達三人。世界まぜこぜカウントダウンの大騒動。シリアの犬に、またの恐怖をよびおこしてしまう騒音。

そして日本が新しい年になってから十時間後にニューヨークも新しい年になったのでした。

さっそく歌手のボイストレーニングがはじまりました。新しい曲を、アルバムを…。

当事者みたいな顔をして、私も付き添って見守りました。

ビル一つ、防音の沢山の部屋にわかれていて、一部屋づつ、ピアノ、ドラム、エレクトーン、録音設備：全部備わり、トレーナーの先生がおられる。

日本の歌手が日本語で自曲を一曲歌った時点で、アメリカのトレーナーの先生は、全てを把握された。

すぐ、背筋を正し、胸郭を広げることを指示され、声をクリーンにする喉のコンディショニングに乳製品はタンが発生するから食べないこと、酒類、コーヒ、紅茶、タバコ、など刺激物の禁止。呼吸法のトレーニング。これ等のことを守るのであれば教えましようといわれる。

全部のことを守る生活をするのを確かめた後の、先生の懇切なトレーニングを受けた彼の歌の変化に驚いた。彼はきつとヒットする。

それを見と比べると、今度は私自身にかえり、ニューヨークに行く度に通うアトリエで、無我の時を、絵を描く、描くのだった。

編集雑誌

今 泉 由 利

○選歌、添削

それぞれの個性が発揮されるよう、手を加えてニュアンスが異ならないよう、心掛けています。
誤字は無いが、リズムは整って心地好いか、それぞれ自身の短歌は自身で守らなければいけません。

○鑑賞

歌を詠んだ作者の心を、読む者の心で、心と心で感じ合うことが、歌を鑑賞する礼儀だと私は思います。
作者の行動や生活の推測、意に反する穿鑿をすることを鑑賞とはいわない、とは私流です。
三河アララギの皆様、良い歌を詠まれるようになりまして。最高級に誉めたいです。
読んでいただいている方々からも誉めていただいています。報告をせず、すみません。

○歌集

長く詠んでこられた貴重な短歌を、一冊の歌集に残しませんか。
三河アララギ編集部で手助けさせていただきます。ご希望なり、方法なり、編集部までご連絡下さい。
印刷所にデータが残っていますから、気楽に本に纏められます。

○会計報告

三河アララギ会員の会費だけでは、三河アララギ誌は発行できません。

会費値上げという問題でも無いと思っています。
不足分は、長年描いてきました私の絵などの販売で発行費にあてています。これからもずっとそうしてゆく積もりです。

○ネットの活用

三河アララギまるごと一冊、毎月号を世界中に読んでいただけるよう、ネットで公開しています。
オーストラリアの友、アメリカの友：読んでいただいています。励みに致しましょう。

アドレスは <http://imaizumiuri.jp>

このアドレスの「三河アララギバックナンバー」で三河アララギ誌の現在から過去にかけて、一ページづつ開いて読んでいただけます。
同じアドレスで「絵」も公開しています。ご覧になってみてください。

○興味を

歌は作るものではありません。遊び、心からあふれくるものを書き留めるだけです。
興味のその奥まで興味をのびし、多くのことを心に貯えておきましょう。そして、奢らず、慎ましく。自然に歌となります。

○上手・下手

何を基準に、歌が上手、下手、というのでしょうか。その次元は考えたり、言ったりする必要のないことだと思います。自分を楽しませる自分に、なりましょう。

和菓子街道 (64)

<http://www.trad-sweets.com/>

平 松 温 子

関宿の町並み散策で足が疲れてきた頃に、ちょっと寄り道したいのが前田屋。こちらの名物は「志ら玉」。江戸時代からの関名物で、一時途絶えていたが、前田屋が復活させたことで、今ではすっかり関名物の座を取り戻している。

〈志ら玉に旅はるかなる宿場まち〉

と歌にも詠まれた菓子ながら、由来は定かではない。この地方が伊勢神宮のお膝元だからか、三種の神器(剣、鏡、勾玉)の中の勾玉をイメージして考案されたという説もある。

漉し餡を包んで真ん中をちょこんとへこませた真っ白な米粉の団子餅に、四季を表す赤、黄色、緑に米粒状の染めた生地をのせた姿が可愛い。



緋毛氈を敷いた店内の腰掛けに座って頂いた。江戸時代の旅人も、こんな風に鈴鹿峠を見上げながら志ら玉を味わったのかもしれない。

染めたご飯粒を散らした伊賀餅と違って、志ら玉は染めて小さくちぎった米粉の生地をのせてある。

◆前田屋

住所：三重県亀山市関町中町407

電話：0595-96-0280

お知らせ

▽歌会(906)を二月二十六日(第四日曜日)に新年歌会として、午後一時より、御津生涯学習会館にて行う。

※詠草二首をハガキにて、二月二十三日(木)までに必着、郵送のこと。

▽三月号原稿は、二月一日(水)までに必着、郵送のこと。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集後記

あけましておめでとうございます。平成二十四年のお正月はいかがでしたでしょうか。この二月号が皆様のお手許に届く頃は冬の最も厳しい時をお過ごしのことと思います。

毎年のことながら、元旦の朝カーテンを開けると、いつも同じ景色なのに常と違うまぶしさを感じます。変らぬ朝の変らぬ景色が別のものに見えるのは心の目が見ているのだからではないでしょうか。そこには感動する心が働いているのでしょうか。感動しようとして感動できるものではないありません。自然に内から湧き出る感動を大切にして今年も歌を詠んで行きたいものだと思いました。

△二月二十六日(第四日曜日)午後一時からの新年歌会に御津町生涯学習会館(旧中央公民館)にてお会いできることを楽しみにしています。

(平松)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一カ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十四年一月二十五日印刷 第五十九巻 第二号
平成二十四年二月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘
平松 裕子・山口 千恵子

発行人

今泉 由利

発行所

三河アララギ会

豊川市 御津町 御馬 西三七
TEL (〇五三三) 七五二〇〇九

振替口座 〇〇八三〇一六 五六三九
E-mail yuri18@cronos.ocn.ne.jp

UR L
Homepage <http://maizumityuri.jp/>
印刷所 株式会社 桜 創 美